

## 公益財団法人小田原市体育協会の経緯

公益財団法人小田原市体育協会は、昭和21年7月28日に小田原市体育連盟として発足し、本年度創立74年を迎えました。この間には様々な出来事がありましたが、その歴史を語る上で不可欠なのは、小田原が如何にスポーツの発展する土壌であったかということです。

始めに小田原のスポーツの歴史を紐解きますと、古くは鎌倉時代の初めから明治維新の廃藩置県に至るまでの間、小田原城を中心に有名な武門や諸大名等が武威を示した地として、剣道や弓術が非常に盛んであったと考えられます。幕末には馬術、柔術、捕術、相撲も盛んに行われていました。明治に入り、西洋スポーツがもたらされてからは、明治22年頃に早くもレクリエーションのための水泳が行われたほか、最も古い競技会として日清戦争先勝記念徒競走が明治28年に開催されたと伝えられています。明治38年には柔術が発展した柔道の稽古が始められ、講道館の始祖、嘉納治五郎の命名による修養館（明治40年）で修業が行われていたなど、各種武術も西欧のスポーツと同化して今日まで続いています。また、明治35年頃、県立二中（現小田原高等学校）の校庭に10面のコートが作られ、生徒が楽しんだ等、軟式庭球も早くから親しまれ、組織も立ち上がりました。

大正になり、日本のスポーツ界が近代的な体制を整え、全国的な組織づくりが進み、各種競技大会が行われることになったことに呼応するように、本市でも前記競技のほか、陸上競技、水泳、剣道、硬式野球、自転車なども競技会を開催していたようです。また、祭礼や記念式典等には相撲が行われ、奉納相撲も盛んに行われていました。

昭和に時代は移り、本市のスポーツの普及には著しいものがあり、幾多の優秀選手を輩出しました。中でも華々しかったのは軟式庭球で、小田原中学（現小田原高等学校）出身の西村秀雄は後に硬式テニスでも活躍し、デビスカップ選手にもなったほか、本市の益田信世（後の初代小田原市長）が、当時の日本軟式庭球協会会長として全国の軟式庭球界に君臨していました。軟式野球、山岳、卓球、バレーボール、スキー、サッカーの種目が続々と産声を上げ始めたのもこの頃です。昭和3年には、水泳、庭球、柔道、野球、弓道、相撲の団体により小田原体育協会（関重広会長）が結成され、以後加盟団体も増えましたが、昭和10年頃に解散しています。この頃から戦争が激しくなり、その煽りを受けて、小田原市もスポーツ活動の停止や各

種団体の自然消滅などがあり、終戦へと向かいます。

戦後、人心の混乱と物資の不足の中、スポーツを国家再建の端緒にしようとする熱意が日本国内の各方面に起ってきました。小田原市ではいち早くスポーツによる復興を目指し、野球、軟式庭球、陸上競技、卓球、水泳の各協会が次々と再建されました。この5協会の統合体が本協会の礎となった冒頭の小田原市体育連盟で、前記の益田信世が初代会長に就任いたしました。小田原市体育連盟の結成式は、平沼亮三日本体育協会会長から祝辞をいただき、盛大に挙行されました。

昭和23年に益田信世会長が引退し、後任の2代目会長には、佐藤謙吉（第3代小田原市長）が就任いたしました。2代目会長のもと、小田原市体育連盟の活動は、昭和24年にスポーツの普及と明るい市民生活の樹立をねらって、市内大字対抗の市民体育祭（現小田原市民総合体育大会）を開催いたしました。一方各種競技会の招致も積極的に行い、昭和25年には軟式庭球や卓球の全国大会や全日本大会が小田原で行われました。その中で卓球大会は、決勝戦の様子が全国向けラジオで実況放送され、卓球競技が電波に乗った最初といわれています。

また、昭和26年から4年4ヶ月の歳月を要した城山陸上競技場の造成工事には各種団体も勤労奉仕に出役して、工事の進捗に多きな力を発揮いたしました。昭和29年には競技の振興と中学生の体力向上を目指し、現在まで続く近郷中学校水泳競技大会の第1回大会が御幸の浜プールで始まりました。

こうした小田原市体育連盟の活動と並行するように、昭和24年に小田原レクリエーションクラブ（江島朝一会長）が結成され、フォークダンス、スクエアダンス、民踊などのレクリエーションの普及に努め、昭和27年に協会へと改組されました。

期を同じくして、昭和27年に市内15地区に1名づつの社会体育嘱託員が委嘱され、翌28年に地区ごとにこの嘱託員が中心となって地区体育振興会なる組織が作られました。ここにおいて、競技団体が中心の体育連盟の他、地区体育振興会、レクリエーションクラブの性格の違う3つの組織が揃い、後の小田原市体育協会の基が確立されたこととなります。

体育連盟結成後の昭和20年代には、バレーボール、自転車、柔道、バスケットボール、弓道、剣道、蹴球、スキー山岳、相撲、ボクシング、ソフトボール、スケートの各団体が加盟しています。

昭和30年に神奈川県を会場に第10回国民体育大会が開催されることになりました。小田原市は軟式庭球

とソフトボールの会場を受け持つことになり、開催にあたり小田原市準備委員会（後に実行委員会）に体育連盟役員をメンバーに送り協力いたしました。この国体を契機に、8面の城山庭球場と城山陸上競技場が完成し、庭球場では三笠宮殿下をお迎えして全日本学生軟式庭球選手権大会が、城山陸上競技場では復活した第1回秩父宮賜杯一般・学生対抗陸上競技大会によるこけら落としが行われました。

昭和31年には、内野正雄がサッカー日本代表としてメルボルンオリンピックに出場いたしました。

昭和35年の第12回小田原市民総合体育大会は市制20周年と重なり、記念大会として、開会に先立ち、体育連盟役員による市中パレードを行いました。

昭和39年には、オリンピックの聖火が10月7日に小田原市内を通過し、種目競技団体、地区体育振興会から選ばれた10代の若者の手によって運ばれました。

昭和30年代には、バドミントン、射撃協会が結成され、スキー山岳会はスキー協会と山岳協会に分かれました。

昭和40年4月1日に「小田原市体育功労者等表彰規程」を設け、市民総合体育大会開会式において、永年スポーツの普及振興に尽力された方々を顕彰することが始まりました。

昭和42年4月8日に佐藤謙吉会長が逝去し、後任の第3代会長に曾我尚夫（庭球協会会長・市助役）が就任いたしました。曾我会長時代の話題には、昭和43年には小田原山岳会登山隊によるアンデス山脈メリセダリオ山南麓登頂成功や第1回小学校体育大会（6年生対象）の開催などがありました。昭和49年8月1日に曾我尚夫会長が急逝し、中井一郎（スケート協会会長・市長）に第4代会長が引き継がれました。この間、昭和40年代には、空手道、スケート、体操、アーチェリー、硬式庭球の各協会が加盟しています。また、前記の小田原レクリエーションクラブは40年代中頃に歩けの会、オリエンテーリング、レクリエーションの各協会を加え、6団体で小田原レクリエーション連盟を結成し、難波博夫が会長となりました。

昭和50年代に入り、スポーツは愛好者のみでなく、各団体が市民に向けて知識や技術を発揮する時であり、競技種目団体、地区体育振興会、レクリエーション団体がお互い相互補完しながら一つになる時であると考えようになり、教育委員会の呼びかけにより協議を重ね、昭和54年6月1日の小田原市スポーツ団体連絡協議会、昭和57年1月28日の小田原市体育協会設立準備会を経て、昭和57年4月29日に加盟55団体をもって小田原市体育協会を設立し、会長に真壁

賢二（水泳協会会長）が就任いたしました。この年には、ペルー女子バレーボールの監督としてメキシコオリンピックを4位入賞に導き、ペルーの英雄として世界のバレーボール界に親しまれていた本市出身のアキラ・カトウが若くして亡くなっています。

昭和60年1月には、体育協会事務局を城山陸上競技場内に設置し、専任の事務局長を据えて戦後40年間行政に依存していた協会の運営を独立させました。

昭和61年に真壁賢二会長が勇退して、後任に難波博夫（陸上競技協会会長）が会長に就任し、新執行部のもと、各種視察等を新たな事業として加え、役員の資質向上を図り始めました。

小田原市体育協会会長は、難波博夫の後、昭和63年4月に山橋敬一郎（市長）、平成4年4月には小澤良明（後の市長）に替わっています。この間、昭和から平成へと時代が変わり、高齢化や余暇時間の増加、また、競技力向上の他生涯スポーツによる健康づくり等、新たなスポーツへの接し方や社会情勢の変化を背景に、21世紀を見据えた活動内容と組織体制の見直すべき転換期を迎える中、人格のある団体としてより充実したスポーツ振興と財政基盤の確立、組織体制の強化のため、法人格の取得を目指し、平成2年から教育委員会と法人研究会を発足させて会合を重ね、協会内部での承認を経て、平成5年3月24日に神奈川県から法人設立許可、同3月30日に法人設立登記を行い、ここに財団法人小田原市体育協会（小澤良明会長）として、加盟55団体及びスポーツ少年団を擁し再発足いたしました。

新たな体育協会は4月1日に事務局が発足し、即日事業がスタートいたしました。

以上が財団法人設立までの経緯ですが、以下、法人移行後から現在までのトピックスを事業年度ごとに記しますと、最初に平成5年度には、5月14日に多くの関係者とともに設立発会式を開催いたしました。6月25日に情報誌「スポーツおだわら」創刊号を発行し、市民へのスポーツ情報提供の始まりとなりました。組織も理事会、評議員会、事業実施委員会（競技・地区・レクリエーション）委員会に加えて、10月13日に事業推進担当部会（総務・財務・広報部会）を立ち上げ、より充実した運営を図ることになりました。

平成6年度になりますと、6月1日に「会報」創刊号を発行。7月10日に（財）神奈川県体育協会との共催による「骨密度測定事業」を実施しました。

平成7年度は、7月11日に第53回国民体育大会の神奈川県での開催が正式に決定し、記念事業として7月23日に「ふれあい競技会」を開催するとともに、理事会で

は国体委員会の設置が認められ、10月4日に第1回国体委員会を開催いたしました。更に11月22日には、神奈川県主催の国体プレイベント「マイペースウオークかながわ95」と本協会事業の「第7回おだわらレクリエーションまつり&第6回NTTウオークラリー大会」を併催した他、国体シャツ・ポロシャツ販売に協力など、国体開催決定記念に沸いた1年でした。

平成8年度になりますと、第10回の記念大会となった小田原尊徳マラソン大会会場を、従来の城山陸上競技場から、12月に完成した小田原市総合文化体育館・小田原アリーナに変更して開催(平成9年3月2日)いたしました。

平成9年度は、6月1日に小田原アリーナ完成記念・新日本プロレスのチケット販売に協力するとともに、10月6日に(財)日本相撲協会との共催による「大相撲秋巡業・小田原場所」を開催いたしました。また、国体開催に向け毎年開催地への視察を行っていましたが、翌年に国体本番を控え、総勢28人の地区委員会委員で1泊2日の大阪国体視察を行いました。運営関係では、国体のために作られた小田原アリーナ、小田原テニスガーデンの完成により、本協会が受付等施設管理の一部を小田原市から受託することになりました。

平成10年度になりますと、5月3日に「かながわ・ゆめ」国体開幕祭を平塚球場に視察、7月17日から始まった「第50回記念小田原市民総合体育大会」は国体開催記念冠大会として位置付けるとともに、10月24日には国体開会式を横浜国際総合競技場に参加者100人で視察に行きました。翌日の10月25日には天皇皇后両陛下が小田原アリーナにお見えになり、バスケットボール競技をご観覧されました。本市では、ソフトボール、ソフトテニス、バスケットボールの各競技が実施され、各会場とも、代表選手・役員であふれ、開催期間中は大変賑やかでした。結果は、男女とも神奈川県が総合優勝し、天皇杯・皇后杯を賜杯いたしました。

平成11年度は、9月23日に小田原アリーナでボリショイサーカスが開催され、本協会がチケット販売に協力するとともに、10月8日に(財)日本相撲協会との共催による2度目の「大相撲秋巡業・小田原場所」を開催いたしました。

平成12年度、15年度と小田原アリーナボリショイサーカスのチケット販売に協力。

平成14年度は、12月7日に、印刷局体育館において、三屋裕子「いきいきバレーボール教室」を小田原地区バレーボール協会の協力により開催しました。

平成15年度は、小田原アリーナ新日本プロレスのチケット販売に協力しました。7月30日から8月5日にか

け、日本スポーツ少年団「第30回日独同時交流」事業を小田原市スポーツ少年団が受け入れました。9月23日には西さがみ連邦共和国(小田原市・箱根町・真鶴町・湯河原町の1市3町で構成)と「第1回スポーツ&レクリエーションフェア」を共催し、翌年の1月9日には関係者262人を集め、法人設立10周年記念式典・新春スポーツ人の集いを開催いたしました。

平成17年度ですが、4月1日に体育協会事務局を城山陸上競技場から小田原アリーナに移転し、事業が始まりました。この年は、第56回神奈川県総合体育大会に選手を派遣し、総合優勝を勝ち取りました。

平成19年度は、永年会長を務められた小澤良明が勇退し、4月1日に副会長だった原義明(会社社長・商工会議所会頭)が新たな会長に就任いたしました。この年には、体育協会ロゴマークが制定され、新春スポーツ人の集いで披露を行いました。また、第20回記念の小田原尊徳マラソン大会を開催しています。

平成20年度は、第59回神奈川県総合体育大会で、再び総合優勝の栄誉に輝きました。

平成22年度は、平成23年3月13日開催予定だった第24回小田原尊徳マラソン大会を東日本大震災のため中止いたしました。この震災については、本協会及び加盟団体が義援金に協力をいたしました。

平成23年度は、昭和40年から続けてきた体育功労者等表彰式を、小田原市民総合体育大会開会式から、今後は新春スポーツ人の集いに変更して実施していくことになりました。また、公益法人制度改革により、公益財団法人移行事務が始まりました。

平成24年度になりますと、6月25日に小学生や親子による第1回おだわらキッズマラソン大会を開催いたしました。また、小田原市から新たにおだわら駅伝競走大会を引き継ぎ、平成25年の新春に第6回大会として開催いたしました。

公益財団法人移行については、平成24年11月3日に、神奈川県教育委員会に公益財団法人移行認定書を提出後、平成25年3月21日に神奈川県知事から認定通知を受理、4月1日に公益財団法人に移行いたしました。この移行を機に原義明が会長を勇退し、江島紘(陸上競技協会会長・元市教育長)が4月1日に会長(通算10代目)に就任し、「スポーツをもっと身近に」を合言葉に、市民が親しみ参加するスポーツ事業を幅広く提供し、スポーツを通じた元気で明るいまちづくりに寄与するとともに、愛される体育協会を目指して事業を展開しています。